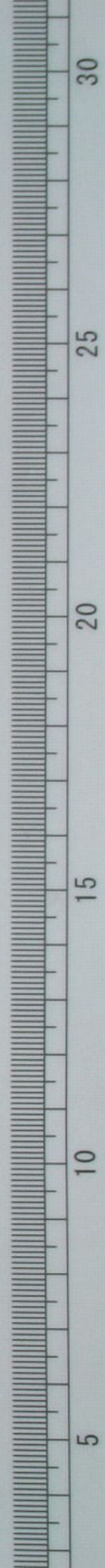


我樂多誌

四

昭和十年六月下旬起筆

特別
14
1919
467



176732

我楽之徒

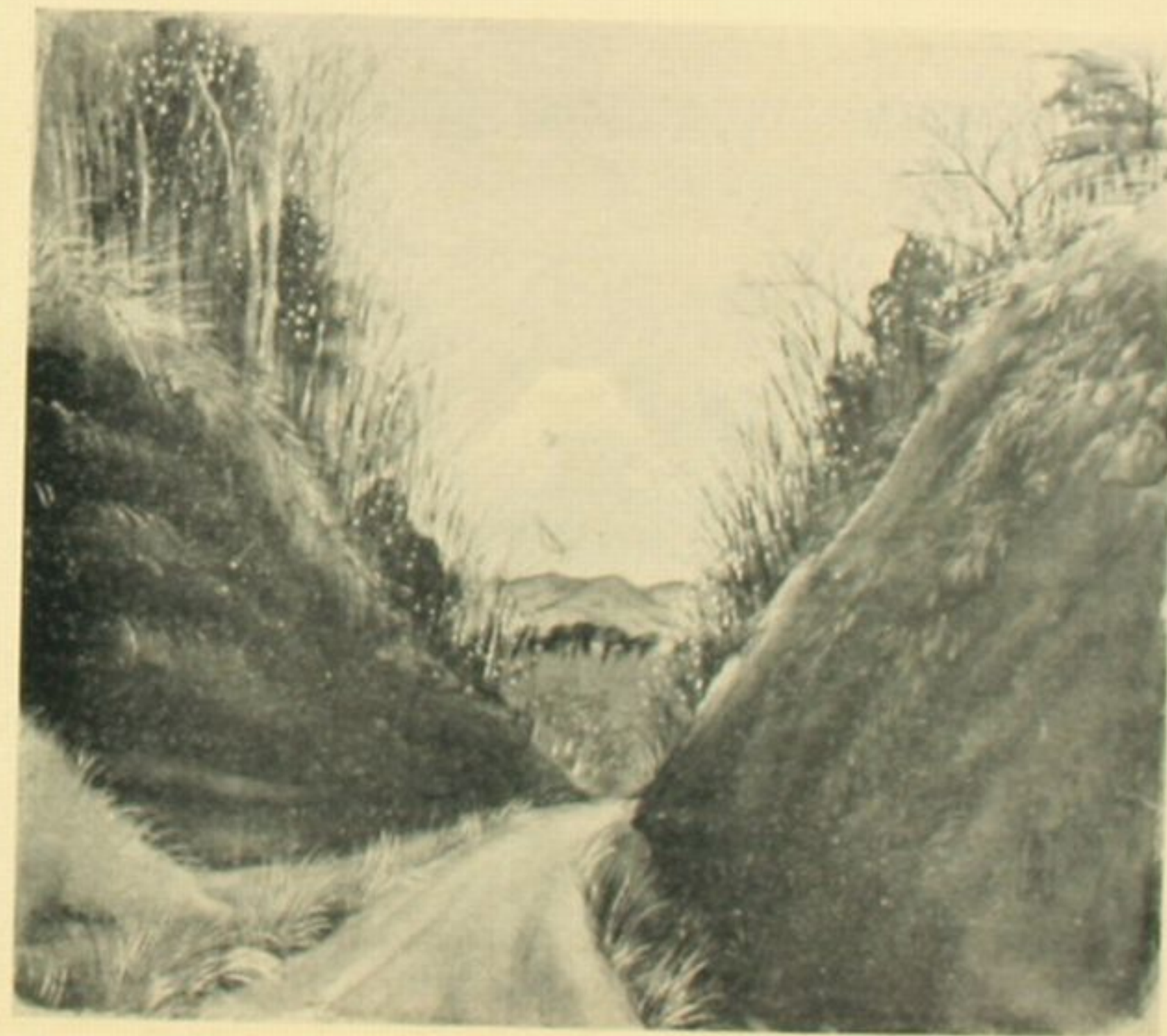
昭和十年六月下流起筆

〇日本人の手細工が異用の料理人をも性たつて
 種々の細工をや、野菜の魚肉などの細工は多く
 工藝的の細工をやる。尤も平凡な竹細工の事
 を割つた。古昔も若くは竹の葉を或る
 形に割ち切つた形刺身皿に載へたり、或は之を
 糸で束ねた用い、料理合物の互ひは、縮んだ合
 のぬやうに同じ置のり、或は竹筒を細く切つて
 是れを花を挿入し、或は味を添くやうにする。亦小形を



畝十木荒

高小に波



千手のつらさしてあつたのも難い。これに二つ共法隆寺の寶
物を携へていよいよ土の天の香久山から取つたとあるが存
在の跡も又携へていよいよめを得て居る。

○二宮尊徳の農民教育の歌ふらく

目で見せて耳で覚えさせて見せて

やらせよ 集めよ や 出まぬいよ

単依の油ひいあるが編成に教育法がある。殊に
いくらく教へても寝る。ことかまひん將大励まらるる如
此點解るる要を得てぬ。

○銀行：銀行令館とよかこーハリスがある。相商の
建一策の外計ハ航刻をいして整理してある。洋銀は
が此以十年記念とが今館祭をやつてあることハ



早さん提灯の考かんだ文がむかひてあるが、三階上層
に清幽が吊るさんである。○が洋銀と映しをいとい
目こつて、随分おひつら宣傳を道にあらと成し
た。

○五七の川の階下新報と大空が今天一場とある。池子
が出た、後んが見ると、意がより自分の夜嵐とよと作例
をやつてあると書つてある。○の記さつてある。○の
中まをわりの意があるが、ゆの字に付とありとある。奔茶
か、自ん、神へも来る。○のことも思ふと、筒茶に載
つたてとて、他の記さつてある。○の記さつてある。○の
末に、○の記さつてある。○の記さつてある。○の記さつてある。
○自ん、大を○の記さつてある。○の記さつてある。○の記さつてある。

一に一般社会の慶祝應に對する希望のありは、この
 慶祝應の中心を下さざるべし。今尙徹底的にやうを
 あるから、不淨物の内閣もいくと、評判を大直しに
 云ひてゐる。全体北景漢の跋扈するの種々の原因が
 あり、或る有力者が後進の使役するの比と云ひ
 んてゐるが、その換へる果して其天舟の漁を捕得
 つかうか、是はかういふ事、世間には北景漢を應用
 して恐喝する人が盛んにあるから、この景漢の活躍
 があるのや、或る時代の慶祝應も、此等を利用
 して、いふもあふ、然るに此等を徹底的に殲滅する
 の容易がどういふ。中々、國家がどういふこと、主流の
 口實のやうであるともあつたが、使役するの比と云ひ、
 利滅



七 誰かよのけり、仍るも、流れ丸も、行雲も、七、あふ。

を籠くて腹を扱かればやうなまゝに一日(廿六)日



世三第と[準]世二第犬忠

ハチ公の遺児 剝製と對面

銅像除幕式に大館へ

忠犬ハチ公の血を継ぐ大は代々木富ヶ谷の伊藤美太郎氏のテリヤとの間に出来たマコしかないと思はれてゐたが偶然富ヶ谷上野町二六太田富氏の飼犬「準」(一)がハチ公の血を継いでゐる大だと判つた、しかもハチ公そっくりの風つた、しかもハチ公そっくりの風つた、左巻の尻、首の太いところなどハチ公の再現のやうだ

◇ハチ公がつかつて代々木富ヶ谷の榎木屋さん小村菊三郎さんとの田氏と榎木氏が客館で出會つた時

ころへ上野野士。しき後あづけられた場所の元安田銀行員榎木貴氏の土佐犬「まさる」と仲良しとなり昭和五年三月十五日「まさる」が重んだ五匹の仔犬のうち生残つた一頭が太田氏に買はれて行つたものでこれが「準」公なのだ

◇榎木氏はその後移轉して太田氏との交際が断たれてしまつてゐたところ、偶然にも五月五日に太田氏と榎木氏が客館で出會つた時

榎木氏の語から始めて由緒正しい忠犬の愛護者だと判つたのだ、太田氏は「死後になつて残念だが、銅像剝製をさせてやりたい」と五月中旬上野野士博物館に「準」をつれて行つて今は剝製となつて居る「まさる」の父親「ハチ公」と六年掛りの彫製をさせてやつたのだつた

◇来月八日にはハチ公の故郷秋田縣大館町でその銅像除幕式が行はれるので「準」もこの日は後継者として出席し、「忠犬ハチ公」の血を傳へるためハチ公のまた孫の秋田縣大館町榎木氏前犬の「五郎」と一緒に秋田大の血を継ぐして寝さうといふことになつた

今朝(六月廿六日)東京朝日新聞に載る所、大史と
収めて可き一匹活きたるを大史に



手印

手印とは未だ存す、意味の異なる手印をあげて、
 興とて相南の息念をこころは、其を空想のやうに
 二か、空想の結尾を起すに、其がすしを起す、
 兄弟も、其の結尾の前が、好むのうらも、
 浮文を、酒を飲む、一息、ある、常つて、
 足指えん、おれ、こんと、行つた、こころ、
 こんふら、戦へ、北の方、手、身、
 真と、さし、も、
 の家祖、感、海、お、詩、文、を、龍、公、美、と、
 龍、公、美、の、姓、の、何、ん、と、ま、あ、久、し、と、
 美、の、用、印、の、山、形、の、守、り、
 の、印、と、云、い、ん、と、お、う、
 天子、下、
 此、の

かくしとわりのおも思つておれ。まふ書書。山背屋施
法をえん。赤松景福の随其。ま左のふく出てあり
此者屋名。公美。字の君。別。別。字。屋。色。孫
彦。か。山。城。伏。見。の。人。百。十。二。世。の。祖。景。則
伏。見。日。宮。殿。と。奉。仕。す。女。子。降。誕。の。時。善
則。鳩。嶺。の。神。と。祈。ふ。夢。に。登。龍。の。瑞。き
其。子。子。登。極。是。百。御。老。國。院。と。す。こ。ん。國
て。姓。を。龍。と。せ。り。一。百。三。十。三。人。定。此。四。年
を。以。て。七。十。八。三。の。終。り

と、祥瑞と有り龍を姓とす。まふの不動の姫のあ
り。似たり。且。く。く。池。の。春。乃。の。法。也。

ハ武蔵野をさへ山と遠のからすうへ(過)七まゝが京
都に利を奪ひこゝかあつてまゝを(産)せよかゝ南
八丈と怒を著し雨を降らし蔭くつて山都といふ
う布り流の現象がある。志のし三條五條の大橋か
着るく流矢の難い過ふ所の木橋のあつても全
属(橋)の文化の工夫を極くつたところからいへば
くも眺く流んもいふ。海原の東急の如き雪無しの
鎌倉のいふいから文化築橋七まゝののあつて後
四五吉ハ十分の工夫を要するハをいふべき也。

法とぬめ、又余所存の三行のカナ字を指し、
 手しめり、四十八字のりつとせしめり、
 せんが、せんが、せんが

近年、漢字制限といふ論が起つて
 なるべくむづかしい字は使用せぬこ
 とになつた。これを率先して實行し
 てゐるのは日々
 の新聞だが、そ
 れでも注意して
 るるとトテツも
 無い漢字一基
 しきは作字
 が飛び出して來
 るといふ具合で
 一方で制限して
 も一方では新字
 が生れて來ると
 いふ始末でなか、五月題いもので
 ある。

ひらがなしんぶんし」と題して全文
 平がなばかりで印刷されたものも成る
 程と首肯されるのである。新聞は半
 常な創意と云はねばならぬことは勿
 論、男の熱心さが遺憾なく現れて敬
 服の他はない。
 然し、漢字を廢するといふことは
 今日に於てすら至難な位であるから
 折角かうした主義の下に起された假
 名書の新聞が、時代に容れられな
 かつたのは無理もない、何故迄顧利さ
 れたか知らないが、あまり長くは續
 かなかつたやうだ。

●活字と加藤弘之先生
 我が國で活字の備き始めたのは慶
 長あたりからで、幕末頃には大分活
 字本が發行されてゐる。

ことから一つの悪い癖を生じた。そ
 れは良い加減な原稿を活版所に渡し
 ておいて、校正の時にうんと訂正す
 るといふ癖で、今日でもこの癖は改
 められてゐない。
 外國では校正が出来てから著者の
 方で訂正(主として書直し)する時
 は、手数料を取ることになつてゐる
 が、日本では活版だから直すのが當
 然とあつて、遠慮會得なく赤字を入
 れる習慣がある。
 有名なのは加藤弘之先生だ。先生
 は脱稿に至らない原稿を印刷所に題
 しておいて、組んでから之を縦横に
 直す癖があつた。先生に云はしむれ

この漢字に對する東角の意見は明
 治の初年からボツ／＼現はれてゐる
 例の郵便の元祖である男爵前島密の
 如きは早くも慶應二年頃から漢字の
 廢止を主張し、時の將軍にまで建白
 した位であつた。隨つて、明治六年、
 男が郵便事務上、その機關としてど
 うしても新聞が無くてはならぬと云
 うて、神田淡路町の啓蒙社から新聞

毎日平假名新聞
 と其のボスター
 市嶋謙吉氏藏
 紙二つ折三枚位が一
 號となつてゐるのだ
 が、活字の字體に至
 つては、一時萬朝報などが使つてゐ
 た字體と同型の活字で扁平體のもの
 を使用してあつた。これは假名のみ
 で書くために語を組むことの上から
 特に此の種の活字を鑄造したといふ

ところで、此の活字といふ名稱は
 誰が附けたか知らないが、東に角一
 個一個字を嵌めていろ／＼に組むこ
 とが出来、誤りがあれば容易にさ
 しかへて正しくすることが出来る、
 等、或は活字で、或は木版刷りで
 發行したものである。

ば、直すことが出来るから活版と云
 ふのであつて、活版の活の字はそこ
 に意味があるのだ」と、先生にして
 は極めて重寶な申言きであるが、活
 版所としてはあまり有り難くない話
 であらう。

珍品 ひらがな新聞 昔語

いろは四十八字で書き
 なぐつた國粹新聞

明治初年即ち捕鯨時代の新聞
 は、どれを見ても新聞らしい體裁
 を備へたものはなかつた。木版刷
 りのものも活字刷りのものも(大
 抵は木版刷りであつたが)表紙を
 被せて綴ぢ込んだ一見難読風のも
 ので、中に掲げられてゐる記事に
 至つては、概ね御布令書(書)の寫しで
 あつたせいもあらうが、記者が論
 説めいたものを書いても漢文口
 調、假名抜き漢字文體の記事ばか
 りで、硬いこと此の上なしといふ
 るものは、先づ上乗の新聞であ
 つた。

が、漢字抜きの平假名新聞である。
 明治六年、前島密氏が啓蒙社か
 ら發行せしめた「まいにちひらが
 なしんぶんし」を始め、同年新々
 社から發行せられた「四十八字新
 聞誌」「假名新聞」後十年
 改めて「かなよみ」明治八
 年四月發行された「平假名輸入新
 聞」
 紀元二千五百三十三年
 官 四十八字新聞誌
 明治六年一月 第一號

まへがき
 せいやうのくんにんにては、しん
 ぶんをよむことを たのしみにす
 るなり。たつときひと、いやしき
 ひと、おとも、おんなも、みな
 よみて、たのしみにすること、に
 つぼんにて、くまぞふしを、よみ
 はなしかの はなしを、きくがごと

おふれ
 このたび、こよみ おあらためにつ
 き、五せつは、おやめに、なりた
 り。そのかわり、神武天皇の、おく
 らいに、つきたまふ一月二十九日と
 天長節十一月十一日をおい、わひ日
 に、なされたりと、いふこと、だい
 せうくわんより、おふれなり。

而も、當時の新聞は報頭機關と
 してよりも啓蒙意識を以て發行さ
 れてゐたものであるから、それで
 は一般民衆に浸漬させることは
 至難であるといふ所から生れたの

が、漢字抜きの平假名新聞である。
 明治六年、前島密氏が啓蒙社か
 ら發行せしめた「まいにちひらが
 なしんぶんし」を始め、同年新々
 社から發行せられた「四十八字新
 聞誌」「假名新聞」後十年
 改めて「かなよみ」明治八
 年四月發行された「平假名輸入新
 聞」
 紀元二千五百三十三年
 官 四十八字新聞誌
 明治六年一月 第一號

まへがき
 せいやうのくんにんにては、しん
 ぶんをよむことを たのしみにす
 るなり。たつときひと、いやしき
 ひと、おとも、おんなも、みな
 よみて、たのしみにすること、に
 つぼんにて、くまぞふしを、よみ
 はなしかの はなしを、きくがごと

おふれ
 このたび、こよみ おあらためにつ
 き、五せつは、おやめに、なりた
 り。そのかわり、神武天皇の、おく
 らいに、つきたまふ一月二十九日と
 天長節十一月十一日をおい、わひ日
 に、なされたりと、いふこと、だい
 せうくわんより、おふれなり。

のほかにて げいしや うることは
 かつてしだいなり○かしざしきの
 ほかにて きやくに なじみつけ
 ぢよらうと おなじわざを するも
 のあらば たがひに ぎんみして
 もふしいでべし○かんさつれうは
 一にんにつき 月に ぎん一りやう
 づゝ おさめること○かしざしきと
 せいのもの かんばんを いだすべ
 し○きやくの のぞみにて げいし
 やをよべば かしざしきの ていし
 ゆ かんさつの あるか なきかを
 たゞし もふすべきこと○かんさつ
 のなき げいしやへ かしざしき
 あいならざること○かしざしきの

「誌聞新字八十四」品珍の天下
 (藏氏古蹟鳩市) 裁體の號一第

官 明治二十五年三月三十三年
 四月八日新聞誌 第一号
 許 明治六年一月

<p>かんさつは つきに 十りやうづゝ おさむべし○かんさつなしにて か しざしき または げいしやしやう ばい いたしきふらはど たがいに もふしいでべし○みぎの おもむき てむきもふすまじきこと○こちやう (戸長)より このとふり おふれ なり。</p>	<p>五せつく おはしい のわけ 正月七日を なくさといふ。な くさは せり なづな ござよふ はこべら ほとけのぞ すとな す ずしろの七つをいふ。これを 七日 に たれば やまひなしと いへ ども、そのやうなものを ませてた べたら わねが わるく なるべし また 七日を 八日ともいふ。ぐわ ん日は にわとり、二日は いぬと て わりつけて 七日を ひとりの日 だと いふなり。それゆへ ぐわん 日 てんきよければ にわとりが そだつの、二日は いぬだの とて あてこともなき わけなり○三月三 日を じやうみのせつくといふ。も</p>
--	---

もて からだを かわのみづに あ
 らい あしきことを ほんふといふ
 が はじめにて、あらためて 三日
 にしたれども、じやうみといふ。ひ
 なまつりも わかしは なきことに
 て、まちがひたることの上し、げ
 んじものがたりにて さへ みゑたれ
 ば、わけもなきことなり○五月五日
 は よもぎの にんきよふを つく
 り かどぐちに かければ、やまひ
 を 上げるといふが はじめなり、
 端午の 午のちほ 五月の 五のち
 の まちがひとも いへり○七月七
 日の たなばたは はしが あまの
 がわにて、であいをするなど、ほか
 らしきなかにも ほからしき せつ
 くなり○九月九日の ちよふようも
 九のかずが かななるゆへ、ちよふ
 ようと いふまでにて、むかしから
 なにゆへなるを しるものなし。き
 くのさけを のみ、ぐみをたべれば
 いのち ながしと いふことなり○
 みぎのとふり 五せつくは みな
 わけもなきことに いろ／＼むづ
 かしき なを つけたるにて、こと
 もでも いまの こととは 五せつ

くのやうに つまらぬことには だ
 まされぬなり。それにひきかへ、こ
 のたびは 一月二十九日神武天皇さ
 まの、につぼんの はじめて でき
 てから ひとを おさめたまふ は
 じめに、おくらいに つかされたまふ
 日に、それより ことしまで二千
 五百三十三ねん、御代は いまの
 てんしさま 徳仁天皇さま まで
 百二十二だい にして、ます／＼さ
 かへましますことにて、せいやうほ
 んこくにて、うらやましがるほど
 めでたきことにて、これまで うか
 とすぎしは さんねんなり。これは
 ど につぼんに めでたきことは
 あらずや。さてまた てんちやうせ
 つは その おちすじの てんしざ
 まが おうまれたなれし日 なれば
 われ／＼が あんのんに くらすこ
 とを つかさどりたまふことにて、
 わがみのうへにとり、このうへもな
 き めでたき日なり。かやうに め
 でたき 一ねんに 二どの おいわ
 いなれば、一月二十九日と十一月十
 一日は ひと／＼ 十ふんに いわ
 いたのしむべし。

せけんばなし
 ほんじよ まついでうにある げ
 いしやの ばゞ ふかゞわの だ
 んなでらへ、まいりしとき、このた
 び てんでうより げいしやの か
 んさつれう 一にんに 二りやうづ
 つ ひきたてられ、てんでうも よ
 くばりだが、これから おもてむき
 げいしやが いることが できるか
 ら かへつて、しやうばいはんじや
 りだと いへば、なつしよ きよて
 さて／＼ りやうけん ちがひなり
 てんでうにて、につぼんこくぢやうの
 ちよらうを おはしいしに なされ、
 よしわらの あげせん 月に 三千
 りやうも おやめに なさるくらい
 だもの、よくばりの てんでうとは
 いへますまい。そのうへ かんさつ
 れうも おやめに なされたたく お
 ぼしめしで あらふけれども、これ
 は ひとなみの しやうばいでなく
 つみなわざゆへ、その とがにより
 くわれうどうやうに こちやうまで
 かんさつれうを いださせるなり。
 いまに また／＼ よしわらの や
 うなめに あわぬうち、くわんいん

た と へ
 一月すへの むめ○四日まへの さ
 くら○ぼたんの はな○これを 五
 だいしゆらの うちにある さんが
 こくに はんじる こころは つぎ
 のまきに いたす。みるひと あて
 てみよ。

本局 新 社
 本所相生町五丁目二十一番地
 定價百三十文

法をぬめ、又余所爲の二行の力ナリ、
 手しめり、四十八字のり、
 世にあらはれ、えんが神を

へきか、北のバツトをこんひある錫紙をより、苧めんハ飛行
杖が出来ると云ふりか、動錢苧集運動が到着
二行ハ、何首を覚うらハツトハ根コトせん、近藤
とむ七姉姉達ハ、錫紙の苧集競多しをやるも
始末が、冬うら口江の巻苧を買ハせうハ結果とせん
のハ、夏居ハハハの何首ハ、苧めんハツトハ、苧めん
とるハ、競ハ、とるハ、アカツキハ、何首ハ、苧めん
錫紙ハ一枚ハ、とるハ、バツトハ、二枚ハ、とるハ、
と、こんが、競ハ、とるハ、と、音回運動ハ、何首ハ、
何首ハ、とるハ、と、一先ハ、

○春早ハ、苧集が、山居ハ、何首ハ、苧めんハ、何首ハ、
と、冬ハ、八年前ハ、一見ハ、何首ハ、苧集ハ、何首ハ、
と、

北島今地上秀敵の手ハ、帰し、次者人を取し、余ハ、
何首ハ、とるハ、何首ハ、とるハ、且、右ハ、一問ハ、とるハ、
何首ハ、とるハ、何首ハ、とるハ、

以「方」取究

○烟名を記述「師言」余の投石を求め来りて聞て棄
一「口」を考しし字あり余の喫烟任歴も烟名
に就ての所感も筆下りしものも「んか」如く也。能
徒利を達しんば切ぬきしを此等にてぬかんとす。

下手物隨筆

——市島春城

私の嗜食は大體下手物です、私自身も下手の人間かも知りません。

私は野菜の内最も有り觸れた茄子と菜を好みます、紫蘇も好みますが、これは乾物で保存が出来ますが、茄菜の新鮮を欲します、従前は郡部の百姓が糞尿を汲みに来る都度野菜を持ち来り、それが新鮮であつて喜んだが、今は剛の仕末が市營となつて新鮮の野菜が手に入りません。

生うどや生ねぎに味噌をつけて食ふのも好きです。

魚鳥の類も臍物を好みます、元來酒徒ですからまともよりはひねりものが好物で、鹽辛類は何んでも好物です、時々焼味噌も併味ある下物として酒の相手にします。老齡におよんで毎朝粥を食しますので、粉末の紫蘇や細かに刻んだ野菜の味噌漬や、にしきいなどは絶やすことが出来ません。前夜飲み過ぎて翌日若くは宿醉の時には、ビスマークヘリングが好物ですが、私は梅干をたき、山葵と大根おろしと混和して下物とします。解酲の料ともなり又酒をすゝめるものにもなります。數日酒に沈湎すると酔の發しない時はコップに梅干數顆を入れ、それを碎いて熱酒を入れて飲むと忽ち酔を發することは請合です。

兎角老ると堅いものを嚼むことが出来ません、かり／＼の聲を發して澤庵を食つた心地のよさを思ひ起します、齒の達者であつた頃、魚類の骨を焼いて嚼み舌を鼓したこともありません、私は大體いかもの食を好みません。

ふぐなどは曾て食つたことはありません、畢竟臍病に生れてゐると思ひます、酒だけは下手物は眞平御免です。

叶北北紙の教の切り抜を考しと云ふ、こゝに書下り書か
れぬ地蔵菩薩の華山に關する事ありと云ふ、余取らば
こゝに大正十一年に北北紙の教に連繫して地蔵菩薩の
一層の事と華山が市河米庵の爲其古縁を画し其
時潤筆として命宗祀の画冊の割巻を得た
ことを考ふる、余の既北北紙を考へ、命宗の
畫冊を考へしことありき、今井の北北畫冊或は免
ゆるべき事と云ふ、画冊より米庵の爲記と云ふ、華
山の印記と云ふ、並しと云ふと断る事ぬらん、此畫冊
の体裁の考へる、凡格あると云ふ、或は小山本
中のことあり、あつたらぬ、如き想像の邊りぬらん、
華山の傳：命宗に秘淑しと云ふ、華山の似たり

華山

七あるが果して米庵割巻のもの、是んか、今井の法
ふかき、所感を記し、客を巻末に附せしめ
併せし、大略を記すことあり、七月四日
○米庵を考へ、俗語の内や、氣の管つたこと
あり、可なり

これに成るる所のありて

瑞辰一々を子を廻ける者こそ

ニシテ印を廻り来りしものあり、一ハ井山舟

の印出人のまき蓮舟の詩人也

の心連環銅印をも花六刻始の款

また他の一印遊印をも村壽山石

菊菊銀石製信也



口河漱三平とよみし人來次此人先年七十分面
し此こと如き二十餘年間有壽の人二分
し七女押高を求め装束漢一七歴たて献上せ

口緒うや八るハ竹端立つ 子紀

日若き口やはつしき石の置所 藤原

〇二三山陽の星蹟と見え、一々云く

碧は霞脚碎、香は乳老輕

瓶梅のつと云

瓶梅夜不知の粧、臥睡移来近臥床、擬

向夢解情暗、交依微步聽得雪、臥香

山陽往て経路を弄す、此詩々集と違す

〇復やらの句に、卷の落りあさきや、梅の花一也

長と似深ししきよのあ

深氣を卷、二三、まの住み別々の、底の如

い、梅の心葉、こころも、はらけけきや

うの約束七、憎や深りの梅の木ん 本調子

余の左の似法と受す

梅の句いよ、木よのいぬ、人に心も、あつらひ

本調子

〇先氏何文記の之信は、昏後今を催し此筆記

能記、日本故味、登載、今在、冒頭、の

一二葉をねあ、這般の産後、不用、表、口を

衝ても、筆記、大古、後、あ、

〇批の花は、似、あ、瓶、挿、心、何、

く、あ、之、を、あ、あ、を、あ、

あ、あ、の、あ、あ、あ、あ、

あ、あ、を、あ、あ、あ、あ、

市島春城 兩翁を中心とする座談會 幸田露伴

市島翁と話の調子のあひそうな人といへば、幸田博士であらうし。兩翁も暫く會はないから、久し振りで語りあつてみたいといふ氣持があつたのを幸ひ、自由に座談をして戴くことにした。

何か問題を提出して話してもらはうかといふ考へもあつたけれども、兩翁の自由な随話隨談そのものが、一種の趣味であり、興味深き讀みものにならうと考へたから、特に話題を決めることをしなかつた。

一切の形式的なことを抜きにして、自由放談をしてもらつたのが、この座談會となつた。

現代日本隨筆界の第一人者であり、博識無比の市島春城翁と、國寶的文豪幸田露伴博士の會談は近來稀有のこととして、本誌の誇りとするにたるべきものであらうと思ふ。

會談は坪内博士の生前のことから開かれて、良寛に及び聖僧生活の裏面談、俗語の變遷、釣りの話し、酒の話、硯談、書談に及び、長谷川如是閑氏の來着によりて、大の話まで持ち出して、座談はとみに高潮した。

幸田博士の回顧談中、饗庭篁村、幸堂得知に關する談話は特に興味あるものであつた。

この夜市島翁の巻舌調子は酒と共に進みて、無人の境を往く愜があつた。

所 日比谷 山水樓
時 昭和十年五月二十三日



市島春城、幸田露伴兩翁を中心とする座談會

誅花毒 養心

春城波



この本は、亦紙の摺の枚数りらむの無味味をいふと
 丸い丸く折し、別れと愛をいふ太極の句に、あるの
 ちみ木ぶりのまゝいす紙の花とを五三をいふを得る也

○近來余の悪書と云ふもの多し、継々一人十
 数紙を喰ひ来り、予報て紙を折る、挿毫
 を挿ふ、喰ひ合紙半切机上に工心し得る、種を
 愛き筆心、成一紙成る、別書、之を挿ふ、若
 候の此行を、好く、継々昔作を受て、已
 ちさき、日暮れを冒し、力心す、頃日開く、粟
 し、二日、二日、二十数紙と心く、右の空を、
 二、空面を、吐き、数紙成る、面倒る、余、
 今、通一の布字、家も難く、頃日、二枚折、七枚

す、布を成ゆて天鏡し、彫ふべきは懸画狀殊と
ゆふ、ドウサリの端本も墨痕不鮮し、
紙を彫めて絹本を曳しとも、其を切り難し
絹本の押墨も、墨に難く、印も二回捺すとの
面倒あり、紙の直るも、裁つとも、也、
扉の二双の押墨も、未このまゝ、此所傳へ
此の矢下、横切の骨あり、秋冷の後を待てん
か、努力か、汗を絞つて、一錢の砂あり、
す、業者の相坊あり、指を墨で、後、初め、
決らん、候と、宅も、書家の為、士大夫の
書、異なり、其貴き、所以、也、

の雅俗、日本風味に、名墨の、か、ぬ、め、
墨の工程殊に、乾燥、ま、ま、可、る、
要す、左の、抄、り、
同、く、面倒、
来、ま、い、支、那、も、
る、こ、の、か、
て、用、ま、
さ、さ、か、
の、
こ、
時、代、

用致しますが、主なるものは古來から龍鬚や麝香などであつて、勿論其中にも良否があり其他の香料も數種あつて種々調合される場合も御座います。

墨の型は往古鐵型と云ふのが使用されたらしく、それは鐵で出来たもので、今でも某寺寶として残つて居るさうであります。現今の型は枇杷、梨等の木材であつて、之に繪模様又は文字などを欲するが儘に彫り込みまして、二枚又は四枚の面を合せて型をつけるのであります。型からとり出した未だ軟らかい墨を、次には灰槽の中に入れて乾燥させるのであります。槽は深さ三寸程で、其の底部に良く篩つた灰を、六分厚に敷き、其上に厚紙を入れ更に薄紙を敷いて、其れに墨一挺宛を間を空けて並べ、又上へ薄紙、厚紙を置き、最後に七八分厚の灰を掛け置き、其れ

を風の無い所へ放置します。そして毎日二回宛其の灰を替へるのであります。之を灰替と申して居ります。第一日は濕り灰を用ゐ、第二日には墨の周圍の、型から食み出した部分を削り取り、第三日目より次第に乾燥せる灰を加へて斯くする事凡そ五日間、又大型のものは七八日を経て灰から取出し、二十挺程を重ねまして、上下より小板にて挟み、繩で締めて風に當てないやうにして吊り置く事五六日、次には其れを十挺宛紙捻で編み、風當りある場所に懸けて乾燥させます。二ヶ月程の後今度は桐箱に入れて保存するのであります。最初に濕灰で徐々に乾燥を加へますのは、急に乾かしますと、墨が砕けたり裂けたりする憂ひがある爲めで、又寒中には火氣の傍や圍の中

暖い時に冷たい處で作業するのは蒸れ砕けるのを防ぐ意味で、七八月頃の暑中に作業する事は殆んどありません。墨の全く乾燥した後はは荳莢で灰氣をよく落し、次には棕櫚の毛で墨色を磨き出します。又一見漆を塗つたやうに見える眞ツ黒な光澤を出す方法は、先づ墨を砥石にて研ぎ、其の上を蛤の貝や棕櫚皮のやうなもので摩擦するのであつて、霜色の古雅な色を出しますのは、濕氣除けに滑石末を塗つて保存して置きます其の儘を自然の裝飾として残して置いたものであります。又上物の墨には金箔で包んだり、或は部分的に之を施したりしたものも御座います。昔はよく飾墨と申して種々の變つた形に作り、様々の模様を描き、金銀青赤等の着色をして机上の飾りとした時代もありました。

○日本に依りて文字を書きしことを「手習」と云ふは、後人の爲め、
讀書の心を手習ふと云ふのである。この「手習」は、
からりするに日本書紀に「百二書博士」と云ふも、
讀むしと云ふも、漢代後人「書博士」と云ふも、
かくてかきと云ふやうな字が現へる。考へ上
手な字は、ことごとく手の上で書かせる。手習の
の字は、通じて「手習」が附いてある。支那の「手習」と
も、そのやうな字を「手習」と云ふ。手習と云ふ文字の
ある漢書「郊祀志中」に「天子識其手」と
書めぬもある。此等と考へれば、日本も書を「手習
と云ふやうな支那から来たものか、或は
○款集申「田田」の考古「漢書」と云ふ小巻と

とある。此成印の南時大活判を掲ぐ。村井素右エの
も奉行を以てて受勅を得也。

前記録に重友が切嗣後弱し比僚友の爲りて建
て凡石母碑の形は形の古きもの而も真河福院佛
を刻し比圓形の碑と繋る事此よりかきと尾張
の正寺にあり比のを後と移しん熱田の氏福寺
に今もありとある。此の徳本上人の寺の表裏
が文を刻しとある。

吾所ありのせ即實地と云ふ地名がある。開漢と
わ郎りのきよのむらさかしくんち地名のありのこ
怪しあるとある。

西ノ二九六年九月ウエニヌガゼノアと記つれ海部

マルコポロの捕虜と云うるは、**釈**に投せられた。その名高
い紀伊を**獄**中口述して著せしものなり。口述の
二ヶ年一つ、き、マルコポロは死するも二ヶ年命を
延ばし得たのみならず、其の紀伊が有名なることを
つたが、**述**に免さんて**出**釈し得たと云ふのは、初め
をいふことなまじである。

佛さまの革命の如き者、**前**、仏んすの都の
湖あり、**史**の士官がスケートを試みし時を忘。
つをいふ事と云ふこと、やよ一人空腹にからと云ふ
傍ら、**離**れて今も、**出**うらうらふかあらう。まの
とて、**釋**の如く、**湖**面の氷が破れた、**皆**溺
死したが、**史**の如く、**離**れた士官の誰かある

このかすおしやとある。

○秋の仲三印氏、**江**和寺花回鈔本、**匡**心方
の種も本を各七冊あり、**此**方**回**寶として名高
いものもあるが、三十冊の内、今残るものは、**一**才
才五才七才九才十の五巻のみ、**本**の包紙は、
前清宗門跡土宣徳心の書として、**明**沈四十二身
七月十六日調査して、**印**三冊五冊本を成るも
此ハ何んの日何んの家、**傳**とて、**一**年をいふ
と、**種**も、**種**も、**印**の如く、**社**うす所も、**工**ロタイ
ブ版、**印**し、**楚**新も、**本**のま、**列**條、**傳**うす、**相**
道の納め、**古**考、**相**まじし、**(七月十一日記)**
○新居、**史**ハ、**傳**の如く、**樂**聖、**送**流、**集**を、**後**

人があがり無聊を遣つた。こんばんはトヴエコン
デルスゾーリン、バツ、シエーベルト、
テツクの真味のある（笑）法が多く収めもある。今
左日アレキサンドル、ジェーン、ボウアエルの逸話
略述する。

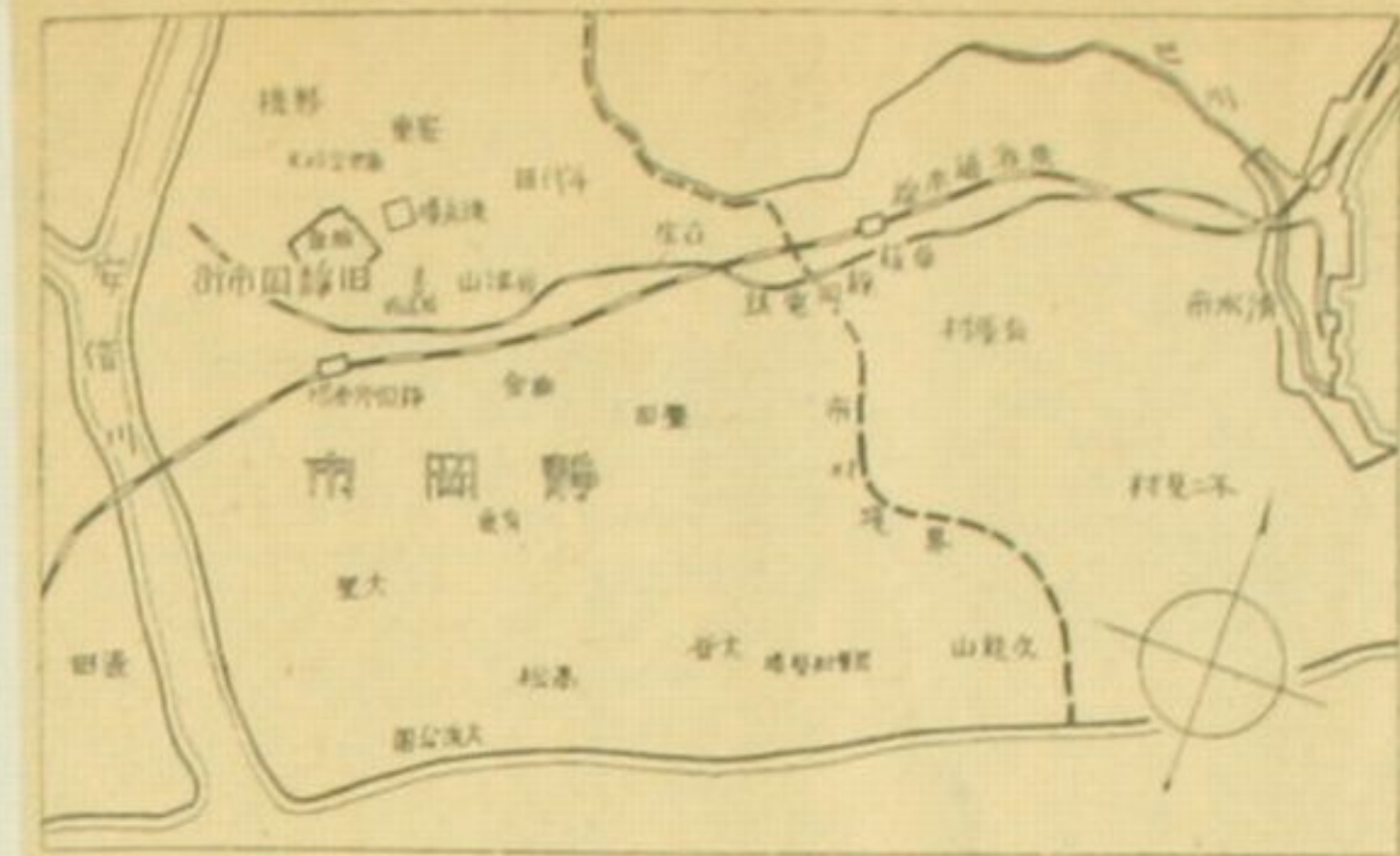
○満洲の海沿いのきいさくの坂があらが、佛塔が未
れと云ふ説のまゝ、ちて教と云ふ佛語もみよ言入
つてゐるのか、日暮の文珠と云ふのが、満洲の名の
起りか、満任と云ふのは文珠と同じか、まか並に地
をさうくと云ふ一説も、揚げおく、

○昨十一日、稀者、後を念の只今を、女園、美吟、一、却
ひくま、龍溪、中、午後五時、二十合、以、可、さうの、地
害を感、九、一時、名、祝、作、の、と、房、の、群、の、ハ、駿
河一帯、殊、日、暮、玉、清、の、法、の、海、を、龍、を、龍、
倒、縁、家、屋、瓦、傷、の、数、七、少、か、と、と、執、し、此、今、初
の、み、少、紙、の、伝、の、と、雲、源、地、ハ、安、信、川、口、に、在、
こと、が、判、り、各、所、に、面、に、大、亀、裂、を、生、し、海、嘯
が、起、り、岩、窟、壁、が、崩、れ、大、蛇、山、の、石、橋、花、の、三
田、を、穿、し、て、五、十、十、神、を、倒、し、到、る、安、目、七、高、丸、の
俵、状、も、も、幸、ひ、二、時、刻、が、夜、合、前、の、あ、つ、た、の、火、火、火
を、免、れ、此、が、随、分、悲、慘、の、死、を、遂、げ、け、れ、の、あ、め、く、さ、い、
納、涼、身、清、水、の、岩、窟、壁、に、大、蛇、を、キ、メ、と、ん、か、の
れ、を、中、に、さ、る、ふ、か、突、如、出、た、龍、の、山、阿、婆、と、せ、に
お、中、に、さ、る、ふ、か、俵、と、や、高、丸、著、の、流、車、並、野

余震に怯ゆる第一夜

惨たり静岡、清水両市

死傷百餘、家屋損壊千餘



【静岡発】十一日午後五時三十分、静岡地方を中心に突如激震起り、清水一帯には家屋の倒壊せるもの相当多数を数へたと死傷者多く、電話連絡の故障も数所に生じ、鐵道の運轉も相当甚大で東海運轉のダイヤは一時メチャクに狂ひ、静岡市内の電燈は一時全く暗黒となつたが、同九時にいたつて復舊し、清水市及び興津方面は小芝居電燈の損壊のため清水市内は十一日夜は暗黒の中に余震におびえながら避難民は不安なる夜營の夢を結んだ、静岡市内一部には午後九時五分、點燈間夜中に全部點燈の見込である、電燈本部静岡市の調査によれば大谷、久能、高松方面の海岸地帯一帯が被害甚重も、甚大で大谷は全壊、一月、半壊七十戸、損壊五百廿、死者四名、重傷五名、輕傷四十一名、西大谷は全壊、一月、損壊五百四十戸、負傷者三名、その他市内の被害状況の主なるものは日出町丸中青果市場は倒壊し、負傷者廿名を出した、外田金方面は東洋モスリンの食堂荷物發送所織布工場全壊し、寄宿舎は傾斜し、女工廿五名が負傷したほか鈴木重吉氏の煉瓦工場三棟倒壊、小島、若松町方面にも倒壊家屋相當あり、被災甚大で近來甚なる激震として、被災に市當局では直ちに救護隊を組織して出勤、日赤支部同院、静岡病院の救護隊と協力救護隊が救護に目覺しい活動を續けてゐる。

死者氏名

【静岡發】なほ午後九時三十分、静岡に連した死に氏名左の如し
 ▲静岡市大谷八木と(○)▲同所深井(○)▲同所藤田幸枝(○)▲同小島南條(○)▲同所高木吉松(○)▲同所北村庄三(○)▲同所市川達夫(○)▲同大谷久保田ます(○)▲清水市入舟町遠藤(○)以上九名

清水港の大岸壁崩壊

このため一號上屋は倒壊、二號上屋は半壊し三號上屋は大龜裂を生じてゐる、株式会社清水港市場も倒壊、市内海上市場、同港岸壁で三千トン級岸壁は前のめりに傾斜崩壊し、

震央は安倍川



【中央氣象台發表】十一日午後五時二十五分、静岡地方、本州中部地方、近畿地方等の活動形にわたるかなり強く地震を感じた、只今(六時半)までの集まつた報告によると三島、沼津、甲府、静岡では震動(弱き方)横須賀、鶴岡、名古屋、豊分、伊吹山では弱震、東京、前橋、熊谷、沼津、高松、高山(飛騨)基本では無数の弱き方、宇都宮、八木(奈良縣)岡山、富山、福井、長野は震動であり、震央は静岡縣東部付近で相當の被害があつた

差當り大きな地震はあるまい

中央氣象台・本多技師談

こんどの地震は同地方としては川後湖とその河口、静岡、天の、いづれも静岡地方で昭和四年十一月廿六日北伊豆を震源とした大地震に次ぐ大きなもの震が起つてゐる、本年四月九日であるが、これよりの震動によつて、駿東郡山から足柄山付近、同地方でも地震があつたが、これは、同地方には差當り大きな地震はなからうから安心して

この地震は同地方としては川後湖とその河口、静岡、天の、いづれも静岡地方で昭和四年十一月廿六日北伊豆を震源とした大地震に次ぐ大きなもの震が起つてゐる、本年四月九日であるが、これよりの震動によつて、駿東郡山から足柄山付近、同地方でも地震があつたが、これは、同地方には差當り大きな地震はなからうから安心して



をしやして一竹者さ
 法へんかかこるる
 無
 予の又これ山陽の竹欵
 後日ハ六麻字を誤也
 一此の心
 六麻字誤多一瓜 是也
 字之六麻者也而不可
 心 山陽撰悔
 とあるが此字を三つとせんを欠き、六麻をハ
 誤りも是る心くも廣くはたせらる。

○ 輔聖曰ぬ今から出版する余の地筆一々
 了る名を命まふべきや成るべく是れけのよい名を
 命まふハ、書出の時あることをおのりあはせんと
 一任しゆるハ文墨帳の私案を信ず未だ此以
 文々ラ帳の字を用いんと書意ハ帳を以て誤
 解せらるゝ重んぶあるのむ、予ハ同意する法ハ
 夫自ら文墨三餘酒と命す (七月十四日)
 ○ 隆世恰ハ外人ハ一時外國輸出せん、その後ハ
 日本ハ逆輸入せんてくるものがある、此ハ只今
 此法が出来が、彩色もが作り、変してゐるものハ一節
 を喫しれと云ふ、恐くも希道其下を画するハ、変を
 を生しにともひ、あらうと、日本恰ハ具ハ外四、

輸云り書るは今後工を要するに思ふ

曰く口人今も山氏母巻の結がひとく行はんとまか
ら何故とすへええと、飛行機上の合夥とせよん
がれも重は賛からんとのりかられと、

又曰く今も名を失念したがある人の改名した其名
は亡児の名を託せよれと云ふ、日本の風俗は父の
名を慕ふことがある方面の例とありてあるに、この
逆である。亡児を愛惜するの情から来れよと云ふ
あつても思ふのが、珍しくいふ事也。

○自分の後合の別荘を今津ハ一二倍してから十三
年の長きに亘りつゝある。今も無條件に税も修繕
も皆な自分が弁してゐる。ふん、留守舎の修繕も

今津は居るし、此の別荘は、今津にこゝに、住んで道に
号位を譲り得たのみ、今は私の厚く名を謝すも
ぬふ。此の十数年の間、彼らに其の集りて考古志
社の堂に満ち、時にまた訪るゑとす、すはる、彼ら
七三の裡、狼狽が狼狽、品置、修葺をみる、此合
津、ハ、え、え、転着、し、え、の、也、彼、漸、や、山、さ、る、志
料、を、早、大、の、恩、賜、彼、の、二、堂、を、修、繕、す、る、こ、と、を、
つ、れ、の、心、を、の、極、め、る、他、は、借、家、し、て、引、移、り、ぬ、い、と
云、あ、て、来、た、か、自、ら、の、差、向、き、を、守、持、の、心、あ、ら、う、
困、つ、と、申、送、り、今、志、は、こゝ、に、其、修、繕、の、文、法、
を、し、て、ある。

○「新洲社の旅行日記」も書面を私の一

家々傳り、月桂樹を以つて美人を飾つて鏡の裏に
とんこを大印する先生と云ふて尊字しれ。

○秋山玉山のふたりの侍に

帝相巽峯雪置之杖素束、突元五年何

笑れ巽峯揮指空

とあるのを、秋山陽元と玉山の半信を笑ひ、并

たの二侍を指す

帝相笑巽雪置之杖素束、雪汁一即黄河

却向在河流

帝謝笑巽雪置之杖素束、疑作此山命山

敢欲較言低

ん一時の就心するも自活傳ふべし、何故か予ん

之んを怨慕、秋山陽元送す

○毎分淡島舟入書を乞ふて、色南の語を得て、因出

此語支那人の得るを、心未以自活と見出さぬ、左の

二語は、色南の語を乞ふて、心未以自と云ふを乞

ふ

深身浴徳、刮垢磨光

をう得る者 技術の進んぬるが、例かれば多く所を撰
んば、徳川朝の趣味は全然除き去つて、鎌倉時代の舊
式に戻るとする方針は、このやうである。既に西院
方面で修繕を了した所もあるが、自分へまゝ一覽し
たうが、十三年次から西院へ取かゝる元比と多くが大
七郎重の終縁とを寓するもの、此方面で金巻内の屋敷
の如き厄成る貴重おもある、此の終縁の店に攝生
を解体して、いろく往來の者向の決するもの、
解決が出来てゐるもの、此終縁としての為め、建
築技術は、大なるサビエツレヨも受け、技術の
進歩に資する所もある。

○今、ガラスが善の如く、ガラスの戸障子、或は大抵の家

あるが、ガラスの障子、この頃の事も回顧すると、その興
味から、自分の少年時代の、最早いろくのがラスの器
具があつた。家々祖父の用いた、其が又大きいガラスの
眼鏡もあつた。切子で、此の菓子器もあつた。こんど切子の
壺が、あつて、誤る石の上は、破れ、外廻を
かゝつた。或は、障子の、何れもあつた。如
何れも、障子の、何れもあつた。如
自分の家の、店員が、江戸土産に、ガラスの、此の相
葉、子を入れた、ものも、度々、土産に、もつて、きて、く、ん、て、を
丸を、ま、た、ん、に、も、も、あ、つ、た、又、吹、か、が、ス、と、い、ふ、の、が、ヤ、マ、コ
と、い、ふ、の、に、せ、子、用、の、手、箱、の、甚、だ、校、が、ラ、ス、の、重、表、に、彩
色、繪、を、古、い、と、あ、る、も、行、い、ぬ、れ、小、さ、な、鏡、も、あ、つ、た、如

代田工風せん趣がある、ある説のギヤマンをテヤマン
即ちグイヤモンドの訛りにも云ふ、此の工業に段々開けて
善及日用鉄工可成るものと云ふ、程々善及此の
同時に美術品とも別るものと云ふ、宮廷の玉工は
ガイヌを造るが重んじ、眼鏡も同一ことと云ふ、
るものと云ふ、ホヘミヤ、千工を造るがガラスの
と云ふ所がある、頗る名家のものがあふ、彩色の
この工場のものは、鏤金があつた、彫刻があつた、
する、更に採用するステンンド、ガラスがあつた、
びの考案の工夫は種々、造るの技巧があつた、優
美術品とするべきものがある、自らの夏時、
品を多用するの心算に乗じて此記を記す、(七月四日)

尚方より傳へられたことを附け加へると、自分の少年時代
の家父はガラス切を所持してゐた、其のガラスを折
つた、ダイヤモンドでも折るけれど切ぬと云ふ、此の
針の先を折るとダイヤが折れ、
石もある。赤自分の師匠にダイヤと云ふと
さん、此の家があつた。紅毛味の主人がダイヤも
製する。女子の髪をビードロに染つては流行
した。此の先、珠がついてゐる、珠も棒も
入作、
浮てゐるものがある。

西園寺公が公使として、
里の娼婦と遊んで、
破壊したの材料金を

徴せんとし、片料金の甚れおいと云ふて酒脱り公も
袋の中のカラスを懸と横つて料金をと拂つれと云
ふ送話を思ひ出さず、

西洋の大商店でい大さるがラス戸を替替めて洋商人
宅より後の煙々を燭を照らす街頭から家
の内が見え、すくやうふりかいくもあふ、この
度先の一年段があるが、日本では敢てこんな徴い
い、レヨリ、ウサドウでも夜中の外を捲い
と気が満ちぬ。兎角がラスは如何んか厚の
空牢のよめむ、破り易い威がある、動もま
酔漢や商人の破壊せんうもする。宜いカラ
スでも家に掛置してあふ、もの鉄板と一般

て之んを犯すことを法律に許さるゝのが、日本の
社会主義徳いさむの切掛である。

支那のあふぬす家、隣家にかラス工場が
あつて、硝子の屑が堆積してあふのを見ても
もんと世々に受け、さあふブチ割つても、ま
と菓子皿に盛つて見ると、宛から氷砂糖の
やうに見えるの、さあふを空の前に出して、
此説もやへれことである。

自分のガラス製瓶をえれり、支那漫遊の時
が確か奉天であつれと思ふ、支那工場は、ま
はりのガラス瓶、か鉄岩、鉄錠解りれ、瓶を
つけて、瓶を吹いてあふのを見れば、あふる、瓶

これよりあつた。何か子斯の工場の熱気のあつた
で久しく見ておもしろい。工場の後ろより
杖押の石が山と積まれている。

此年いあつたか。ガラスの輸入品も服部時計店
と陳列して見せることがある。主として千工の
製造品で種々のものがある。多くは貴族的豪華
のものを目を驚かした。併し鍍金が飾りな
厚い過きグロテスクな見ゆ。元来ガラスの本
体は透明の透明であるのに、鍍金で鍍め
ハ本体を没却する。妙ひがある。扱ふ感し
自分かため、濡れた時、何れも味のものも獲
れいと、骨董店を巡つた。何一つ無つた。

此一在崎の校反か之を、タキ、その磁器のランカ
を割き、これ、えん、レーボルトの用ひに、よむ
是付び普通のよと、変つちる。みる。だが、全
屋の部合、レーボルトの文が刻せられている。
自分か、ま、又割き、受けたか、と、あ、打
る。時、骨董店、か、と、く、く、く、の、途、中、に
破壊、し、た、の、惜、し、み、の、た。

自今、何時を、追憶、す、か、ガラス、巻、の、或、物、を
あ、あ、早く、用、ひ、え、ん、や、う、思、ひ、く、薬、割、を、粉、末、に
携、り、カ、ラ、ス、巻、の、梳、形、り、二、ウ、鉢、と、二、ウ、棒、を、か、い、
と、あ、つ、た、や、う、と、思、ひ、く、南、京、珠、と、つ、ま、を、か、い、
と、あ、つ、た、や、う、と、思、ひ、く、心、つ、た、の、や、あ、あ、や、う、か

形がうすを編人が刺身を載せようとしてよき
ハコも早くかゝるやうにやうな思ひん。

今この空瓶を二束三文と賣脱して誰かの惜しむ
る人が、もし片の金に行くと、空瓶が花瓶とさう
て賣脱する置かぬやうなことがある。瓶の
種々あるが、ボジンの香気は中山位の頃のものと
、空瓶の経と香気は凝々、美術的又出来て
居るが、葉をゆするものがある、酒蒸しをゆす
けがあるが、よん、全く例外で、カウ瓶を粗末
に扱って、よんかきやうなものは、自今から
年時代大なるおれ頃のすも想ひ出すと、
ハコも空瓶にふしの俵がある。ある夏字の

漱石の「坊っちゃん」

松竹のスタンプリレー

花柳章太郎は虫が大嫌ひだ想だ、(章太郎ファンよ)



記憶して下さい)その花柳の「坊っちゃん」が田舎の教師に赴任して、意気盛な中學生達のために宿直の蚊帳の中へ「バツタ」をシコタマ、入れられたのだから彼氏、ガゼン悲鳴をあげてしまつたのである(歌舞伎座七月興行夏目漱石原作坊

つちやんの一場面) 罪なバツタは舞臺監督木村莊八氏の手を描かれ、罪亡しの爲に歌舞伎座でボン／＼とバツトに打ちつけて押捺を始めた所世はスタンブ時代、所は歌舞伎座、好劇家とスタンブファ

小堀誠、山嵐が井上正夫、赤シヤツが伊志井寛、うらなり、伊井友三郎、野だいこ藤村秀夫の適役揃ひ、外に「二筋道」と「巳が罪」があり、この夏の見ものとして好劇家に大歓迎を受けて居るが歌舞伎座ではスタンブ時代の波に乗つて、この

を作り。これを市内の人氣店八軒
日本橋角 柳屋
浅草雷門 雷おこし
銀座 伊東屋
浅草橋 町田糸店
新宿 出羽屋菅音器店
丸ビル 森永キヤンデー
京橋 日本スタンブ協会
神田かち 大木合名會社
町 大木合名會社
に預けて七月十日から押捺してゐるので、劇とスタンブと兩方のファンの大セッションを起してゐる。
(松竹のこの快樂は同宣傳部の頭の下さを立證するものであるが同部では續いて各劇場、映畫等のスタンブを作り大いに斯界の尖端をゆく計畫であるのは双手をあげて賛意を表すものである。



八人の主要俳優の似顔と名場面を配した珍品スタンブ

の内なる心を、余は一年の長きを七月廿一日の誕辰が過ぎても、年々高き目視の記念として、瓷瓶一基丈一尺四寸許、筒形も、花の形見し白と見紛ふ、磁器、此等の京都陶土の、花の形見し白と見紛ふ、其の、上重果も、甚重、内なる自白の、壽歌、録、此一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

(七月十八日記)

しとて此の道のおおしに浴しぬ。神保町の前途の登り
多幸多福をいふことも笑止せむるを得ぬ

以上、山と房が来年創業五十年日あるのを神
保町の文化史と出版せんとし、一部の主行を伝記
さんとの試みを行と起し、又此が扶別外史
くまのわきと宋陽道史を著し、清史の時を著
る傳のたると清史を著るも著き、直すべしなり

○浅草の浅草寺、将公権高の恒冊ハそ後花ん
有る、是の松平(冠山)侯の受持の死を悼んで歌
て書添りつむは、其後米を企てある、其わらわん先
のめ

ささゆ子けうき(向)して一久きハ

えんれんことし、袖をぬんける、此之

浅草寺ハ冠山侯所なる寺也なる。

○中江杜撰ハ京都人が母を信ひ、彼後、来り出、
此の娘ハ此の人ハ多、其の七、皆書画、神楽を能くし、五
色の節也、其の杜撰ハ、其の詩ハ、杜甫の
如く、書ハ、織の如く、可く、其の意を寓
し、此の事也、其の事也、其の事也、

古志王神社から嫁いふしへ

越後には珍らしい緋梅雨型の天候の續いてゐる六月廿四日突然思ひ立つことあつて新發田町の同志を訪問した、先づ中學校へ行つて見ると金塚友之丞先生ほどの小學校かへ郷土地理の連續講義に出張されてお留守、新井寛勳先生に初めてお目に掛かる、先生は精悍な體軀の持主で篤學は金塚先生と双壁、一見舊の如くそれからそれへと話が盡きない、私が五十公野の高四王神社を見たくて来たといふとこれから同道しやうと早速だ、小雨の中を御案内を乞ふ、高四王神社は從來の推定によると高志人(越人)の酋長を祭つたものだらうとの事だが現在知られてゐる分布は左の通りで

羽後國由利郡北内越村中館字宮田、同 同本庄町光風園内同 同象潟町、同仙北郡大曲町小貫高畑、同雄勝郡秋宮村中村、同平鹿郡横田村(植田?)、同南秋田郡寺内村(舊秋田城內國幣小社)同山本郡神科貸子所、同 同榎山町、同(北秋田郡又は鹿角郡内に一ヶ所) 同飽海郡遊佐村野澤、同 同大服部村(稻田村服部)、同 同觀音寺村、羽前國西田川郡鶴岡市、同 同豊浦郡由良、同 同湯海郡五十川、

磐城國田村郡三春町眞照寺内古志王堂、岩代國河沼郡野澤町古志王原、同耶摩郡慶徳村宮在家、陸前國刈田郡齋川村陸中國稗貫郡矢澤村矢澤、同紫波郡徳田村胡志王神社(今徳田神社に合祀)陸奥郡二戸郡小谷合村、其他疑はしきもの一二ヶ處(陸中國上閉伊郡土浦村、羽後國秋田郡率浦、同郡雄勝郡役内、同男鹿半島南磯分村五社堂赤上神社同舊石辻組大内目村等)以外

越後國東蒲原郡津川町、同北蒲原郡五十公野村の二十何ヶ所であるがその中羽後一國が十三ヶ所以上で過半数もあり越後は僅かに二ヶ所阿賀野川の右岸に祭られてゐることも意味ありげで、しかもその一ヶ所の津川町は昔の會津領である、かう考へて來ると古志王即ち越人の酋長説は確にもつと再検討の値があらう、もとより結論を附ける時期ではまだないが、兎に角一つだけでも現場を見たので何か自信がついた、古志王神社の社殿は常に北向きだといふ傳説もこゝで又た確められたし、二度三度火災後の假堂だといふ玩弄物のやうな祠の扉一杯山の赤土の塗りに附けてあるのを見て新井先生に尋ねると、これはかうして扉の合せ目や割れ目に塗つた土を剥いでからに塗ると冬もアカギレが切れないといふ俗信だ相だ、天王市島家の本家から奉納した石段のイキサツ

梅心一

ねんく ねんく ねんくや
この子が 寝入つたら 何くろば

小豆まんまに とと掛けて

ざつくり さらりと おんまらしよ(高志路、一ノ六)

越後紫雲寺郷の童謡である。報告者、田桃咲さんの註に「おんまらし」不明とあるが「おんまらしよ」は「御参らせう」で「差上げませう」といふ意味である。南蒲原郡見附町の童謡は、岩倉市郎さんが「旅と傳説」六卷十號に報告してある。

ねんく ねんく ころりんや

此の子が 寝つたら 何哭るば

暖つたけまんまに と、かけて

さつくり さらりと おんまらしよう

末句は「たべなされ」とも歌ふさうである。オンマラシヨウの意味が不明になつたので、言ひ改めたと見える。同君は、オンマラシヨウを「食べさせよう」と註して居るが、さういふ意味は無い。

〇あるはあめりか... 見込研究... 叔味があつた... 俗も考
はしからい... いろくの... 俗をう... 何ん若未かあ

以後ハ念リサス。六十四年を庚申返りとなして祝す
ることキハ今日に於てハ祝し由業がしるい位、華甲
ハ多い。この道ハ壽を祝すること、美らるるおの侯が
ある。他人から祝するの力も自祝もある。大抵ハ他
人から祝するが、自祝ハ速意ハ持て、
一も、其の消極の態度を論徳とする、よそ
へある。併しこの檢討を要すること。自から喜
ぶことを自ら祝すにかうとて、何人の不都合があ
らうか、何れかハ消極をすとする。曰天地に於てこそ
速意を美徳ハ呼ばるるが、今ハ是ハ世のや
むらひ。自ら喜ぶことを敢て速意をせらるる喜びを
めらりし、其喜びを人々欲つことハ、空手ハ合理的

ことが徹するから、喜と云ふもの、いつも
心機が活解のさうから、健康が病魔に侵すこと
が来らう、自愛の道ハ、斯くあるべき、自今ハ個體を
ことを養生の訣と考へ、善道衛生の訣と云ふん
て、このよハ、小乗を念し、自分の健り重きを置く
自愛の道と大乗即ち物神の衛生ことを壽大
乘衛生として重んずべき、此と云ふも、
以上

内是業成を中心とする、今ハ自今ハ内是の
業成を祝し、此大業成の、自分の所習
の道を加ふ、行つてあること、業成はあつ
て、其業成を仰へて、其健康を保つてある

この傳記を讀むと、おのづから、白のゆゑの日記が
年々一年おのづから、おのづから、おのづから、おのづから、
壽と祝ふまゝに、おのづから、おのづから、おのづから、
真に感概に、おのづから、おのづから、おのづから、
二法殿が、おのづから、おのづから、おのづから、
の、おのづから、おのづから、おのづから、

○古書に、種々、勝意文庫の花記、おのづから、
と、おのづから、おのづから、おのづから、
この二平殿の、おのづから、おのづから、
事と、おのづから、おのづから、おのづから、
漸やく、おのづから、おのづから、おのづから、

松本幸彦 (月痴と稱す) 文政

天保の文人

洩巻花の、おのづから、おのづから、

松本府、おのづから、おのづから、

洛陽名園記

右、おのづから、おのづから、

勝意と、おのづから、おのづから、

不、おのづから、おのづから、

○蓮、おのづから、おのづから、
と、おのづから、おのづから、
と、おのづから、おのづから、



蓮の花は 日本が世界一

聖徳太子の御頃傳來

江戸時代末期毎年六月廿四日懸燈籠といつて、蓮の花の開くのを賞する會が行はれましたが、その後ながい間中絶してゐたのを「蓮の花が開くときに音がするかしないか」といふ學術的疑問を解くために植物同好會がこれを復活し、舊曆の六月廿四日に當る廿四日午前四時から上野不忍池で懸燈籠を行はしました。終つて午前六時から

露天堂で牧野富太郎、大賞一懸燈籠士の蓮に關する講演がありました【本紙要約】
(蓮) の花の音がするかしないかといふ疑問は野治廿七年市村博士が専門誌に記したと發表したのは、牧野博士、三宅博士らは蓮は音がしない、音と聞えるのは鈴やなんか、飛び込む音なのだと言張した。もちろん音がするとしてもそん

なに大きな音がするわけのものではないから、都會の騒音によつて聞えないといふこともいへるわけで、この問題はやはり疑問のまゝに持たれることになる。(二) のくらゐ立派な蓮をもつてゐるのは世界のうちで日本だけなのだ、そのもとはやはり大體で何萬年前の化石のなかに蓮があつたといふ報告もある、日本に運つてきたのは佛敎が盛んになつた聖徳太子の頃と思はれるが、その後いろいろな變化的な手續を経て、現在では十種以上の花を擧げることが出来る。

白い花で大きいのが金糸蓮、小さいのが眞如蓮、瓜紅色のが紅蓮、紅いので花弁に條があるうち赤が長く大きいのが金糸蓮、小さいのが雲上蓮、赤が丸くて一重のが蜀紅蓮、八重のが朝日蓮、條がなくて弁の長いのを不丑紅蓮、丸いのを淨白蓮、紅白斑なのを不丑度蓮といつてゐる。
(帝) 展などで蓮を指してある種をみると、丸い蓮に條をかいでゐるのがこれには蓮を誤解してゐない、蓮の葉には上下があつて、一方が傾いてゐる、この葉も音が別々に切れてゐるのだが、だん／＼響つて丸くなつてきたもので、葉の下の方のものには中脈があり、上の方にはこれがなく、上下ともに中脈がある形は上、下とも凹んでゐる。支那人は葉をよく理解してゐて部分々々を正確にみて名前をつけてゐる。

小田野直武小傳

小田野直武は名を直武字を子有、通稱を武助と云ひ、羽陽以外になほ玉泉、蛙籠亭等の號がある。角館城代附であつたが、後に近侍として義教の身邊に在つた。繪畫を愛好した能くしたが、義教同様頗る進取的な性格の人であつたから、侯に隨從して江戸に出るや、蘭學者の群れに交つて見聞を博めてゐた。平賀源内を藩政の顧問たらしむべく、重役の益戸助四郎に推薦したのは彼である。傳へられてゐる。斯る次第で源内の洋畫談には前より共鳴してゐたのである。ところが主侯の義教より研究せよと命ぜられたのである。彼は欣喜せざるを得ず、鋭意研究に従事し、遂に洋畫法の大體を會得するに至つたのであるが、杉田玄白が安永三年に出したターフル・アナトミヤ、即ち Anatomishan Tabellen の譯書『解體新書』の挿圖は實に彼の手に成つたものである。そして本圖は木版で試みたものであるが、司馬江漢が銅版で地球地球圖などを出した天明三年からすると約十年前である。その畫も義教同様却々優秀なものである。然るに安永九年の五月十七日僅か三十二歳の若齡を以て逝いたのは遺憾此上もない。子の小武も亦畫を能くし、天保十年に六十八歳で歿した。(裕亭生)

藤田 吳 江 傳

藤田吳江は名を憲、字を憲章と云ひ、越中富山の藩士で文政十年の十一月二十一日に生れた。幼少の頃より學問を好み、また繪畫を愛したが、最初は狩野の風を學び後に南宗の風に轉するに至つた。長じて江戸に出て、藤森天山の門に入つて學んだが、天山が勤王説を稱へ、幕府の忌諱に觸れて江戸を追放されるや、吳江も亦歸國したのであつた。と、やがて藩侯の教授に擧げられた。が、此間、時事を論じて屢々藩主に上書して居ることは特記せねばならない。戊辰の役起るや、彼は藩軍の參謀となり、王師に隨つて兵を越後に進め、松原山に長岡の兵と戦つたが、一丸飛び來つて左の頬に命中した。彼は『無念!』の一語と共に地上に倒れたが、治療數ヶ月、創痕全く癒えた時は既に東北の各地は平定してゐた。彼は藩侯の命に依つて公儀公用人となつたが、廢藩置縣の際に退き、以來、官途に就くを好まず、明治の初年に楠本正隆が新潟縣令をしてゐた時暫らく同地に在つたが、後に東京に歸り、長三洲等と交遊して、悠々自適の境に詩書畫を娛しんだ。その作品は何處までも人格と學識を反映したもので、風韻は技巧と相俟ち、洵に文人南畫の上乗のものとなつて宜しからう。明治十七年、繪畫共進會が開催されるや審査員に擧げられ、また畏くも明治大帝の御沙汰を拜し青嶽山水の一幅を献上したこともある。明治十八年の五月二十二日、五十五歳を以て歿した。

直武の洋畫人物、列
紙蜀山人の狂歌を合
装する一冊余か架
中より可久しく誰
の筆下も解さん
うねか直武の筆
と認められ稀人
と云ふ珍物あり

藤田吳江は越中富山
の氏家康の家、好白
宛して抑書せし余
の家父の書き、此
此藤菜の日圓こそ
家父の考めたる後
後也あ、吳江の
私印荒干亦余
にあり

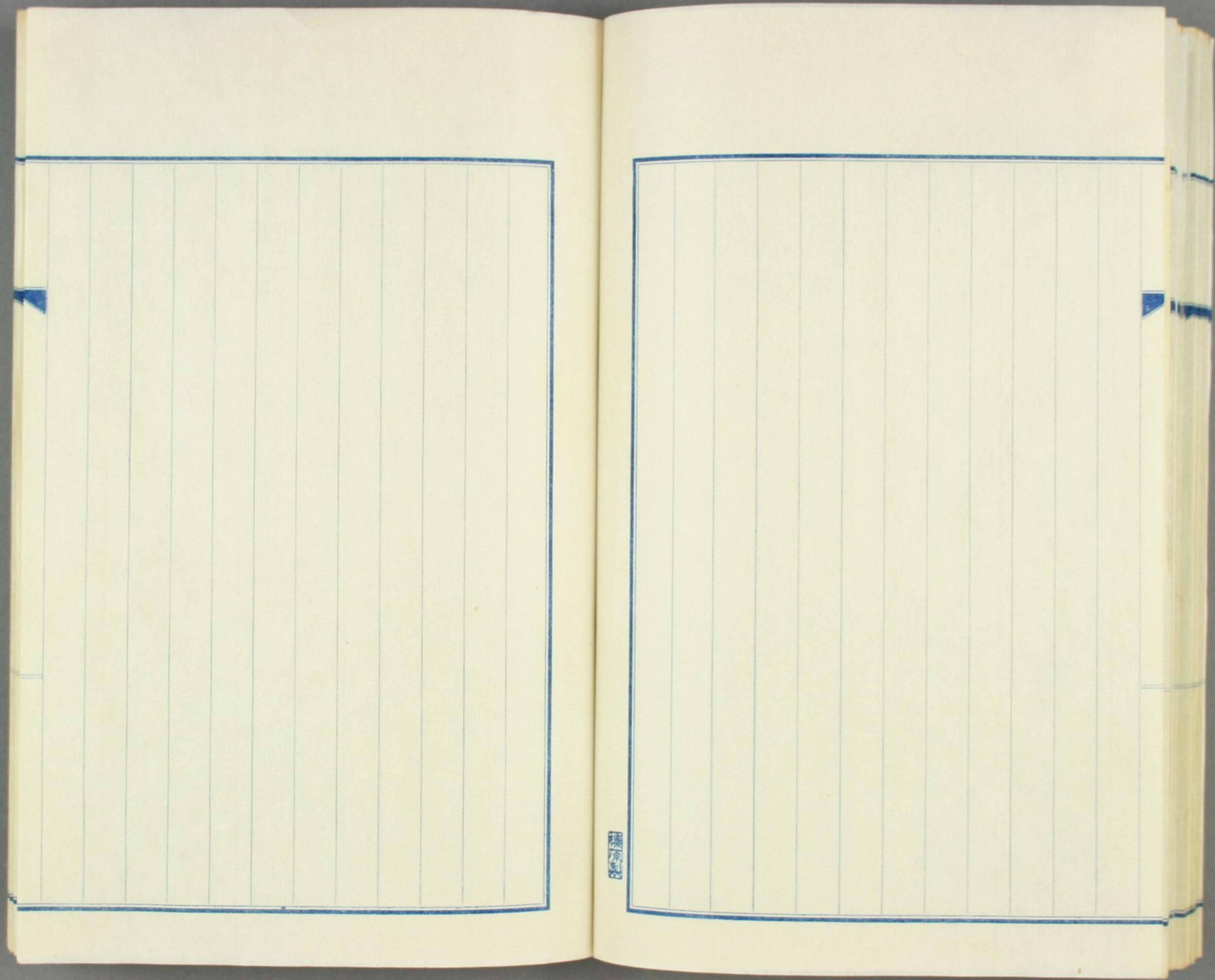
本間翠峰は越後西蒲原郡巖室村樋曾の人、名を榮、字は子欣、通稱を榮吉、なほ翠峰樵者、荻渚漁夫等の別號がある。翠峰が畫事に携はるに至つたに就いては、一場のエピソードがある。彼は十四歳の時に彌彦村宇上泉の銘酒白雪の醸造元多賀家へ雇はれたが、多賀家の主人佐七郎は風雅の道に厚く、二峰と號して畫を巧みにした。ところが、翠峰は幼少の頃から繪畫を愛好し、繪手本相手に何かと畫いては楽しんでゐた。随つて主人二峰の畫に眼を注がざるを得ない。それを觀て取つた二峰は、一日「お前は繪が好きなやうだが、ひとつかいてごらん。」と、蘭竹を畫かせたところ、年に似合はず却々巧みであり、そこには鋭い天稟の閃きも見えるので「どうだ、畫家になる氣はないか。」と問ふと、二つ返事で實はそれが希望だといふ。そこで二峰は三條の長谷川嵐溪の許へ入門させて萬事面倒を見たのである。

すると、好きこそ物の上手なれに喩へに洩れず、その進歩は著るしいものがあり、果ては嵐溪の驚歎する程の域に入るに至つた。斯くして師の門を辭した後は、源流に遡つてひたすら元明の古名畫を究め、遂に斯畫の妙諦を會得して、山水、人物、花卉、鳥獸等、殆んど往として可ならざるはなく、畫名は北越の畫壇に噴々たるものあつたが、第一回内國勸業博覽會へ力作を出品し、それを動機として上京し、東都畫壇に雄飛せんとの希望を懷いてゐたが、それも空しく明治十年の七月二十六日、卒然として三十五歳の壯齡を以て逝いたのは、恰も文晁の嗣子文一、楳山の息華谷、竹田門の偉材高橋草坪のどれにも思はれ、あたら進歩の極みであつた。

本間翠峰

師の畫家：余の尤も味を覚ゆ。本間の筆鋒也。三十の北越で歿し、其の少少惜む。天壽を保たず、都て其の有数の畫家と云ふべし。家系は柳菴山あり、屏風は双あり。





100

以下
3丁
白紙

はかなな水化

◆◆ ぬぎ過に技余ノンホ

(B)

人恩大はてつとに業糸蠶



製氷工場の本数増加は七百五十
二(昭和九年)大正九年の世五を
思ふ時、驚くべき増加に、製氷高
はよつ二百六十萬トン、東京の世
一萬トンを要し、大阪、山口、
長崎が目立つて多い、これ、水の
清化は大都會と主要産地が
大手筋であること從つて水の利用

される方面を物語る
宗教的訓練と、地理的環境は日
本人を、世界的の食糧國民に仕
立てあげた國民の嗜好の變化で
是れを十分の一もくはれぬ
のだ、わが國の冷蔵庫はそも
くが鮮魚貯蔵を目的として創
始されたゆゑである、一年
を通じて冷庫に出入する物定運
の急増は、鮮魚類、鮮果、鮮

製氷等で約八萬トンである、
いかに知きは冷蔵庫の中で凍り
ついたら、鮮魚の鮮にならうと
一年に五百萬尾も待機する始末
だ

代は、どの産物もさうであ
つたやうに、大正八、九牧であつ
た、それから日自押しのくんだり
振で、この頃は全國的の生産急
で製氷業者は多いこと夥しい、だ
から例へば冷製製氷工場組合(東
京)などは、十對組合法製氷八條の製
氷を商工省に製氷これ従つて、ア
ウトサイダーの製氷一本製だ、
これも多量に認められ、製氷のちよ
んざり製が、がらや／＼鳴つてゐ
る

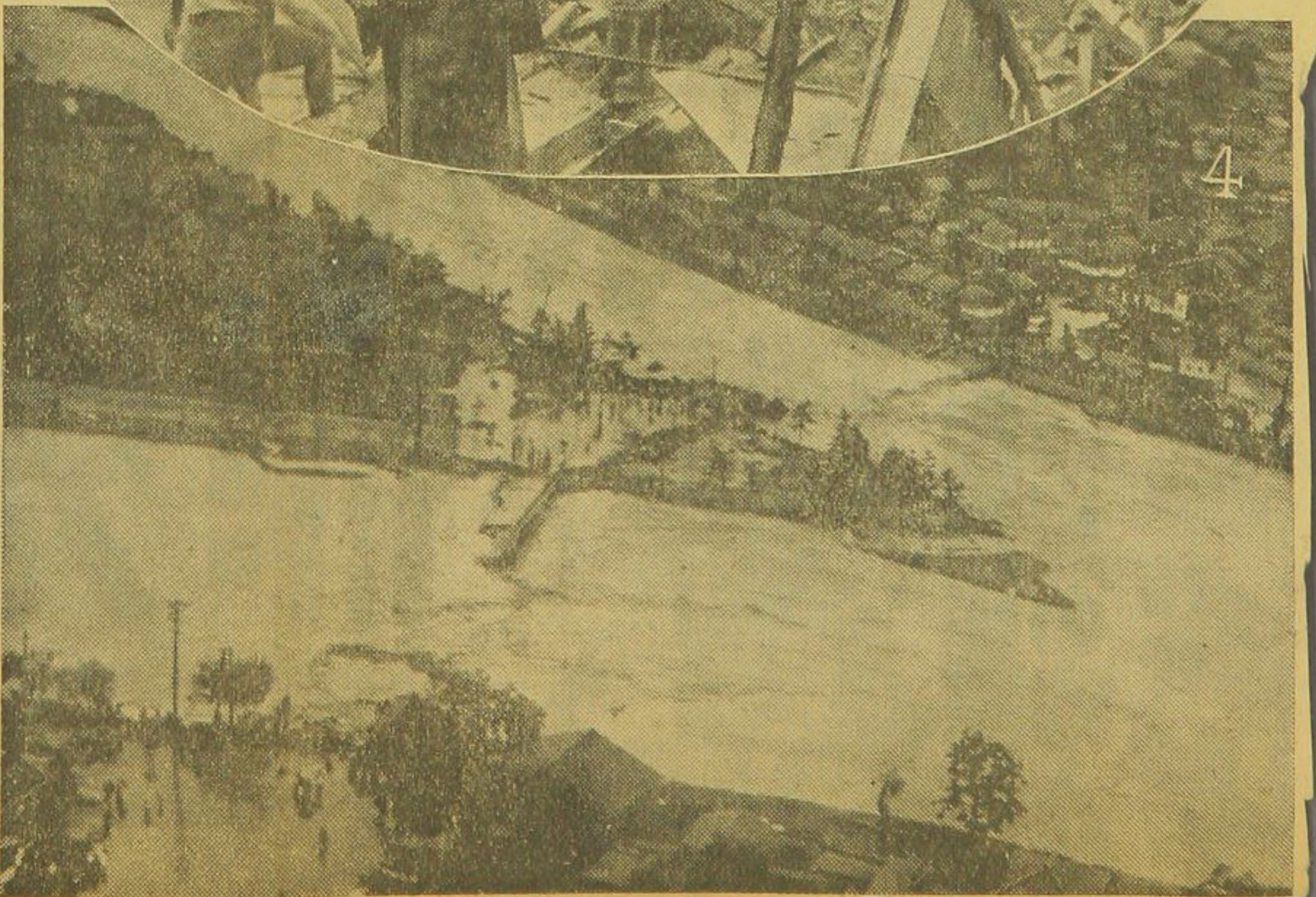
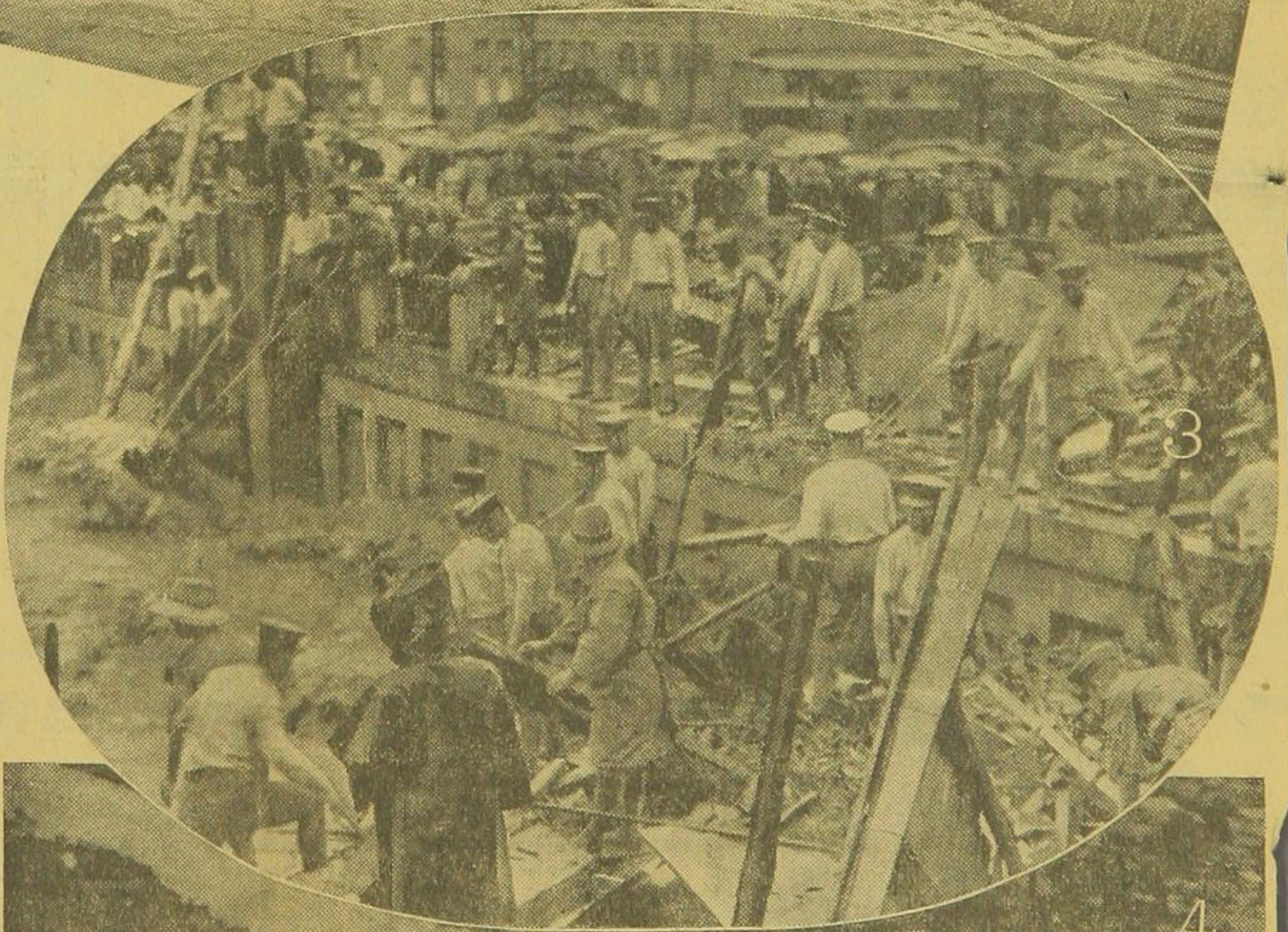
もそれ、牛、豚、馬肉に牛乳、
鳥肉、ハム、バター等に凍らす水の
功効はいふだけだが、製氷は實に
製氷業の大恩人だ、製氷は製氷
業を頂戴にまで隆盛させた、だが
製氷の起りは所らしい、殊に製氷
は、六十餘年前たゞく製氷を志
所に附随して、製氷を賣つたのに
ヒントを得たものだ、こゝに本職
の水が發端して製氷業の本職と
なつて製氷界は一大革命を起した
そして製氷の保護はもちろん製
氷業に果す役割は大きい、大正
製氷業に果す役割は大きい、大正
製氷業に果す役割は大きい、大正

水は一日目大樽三錢五厘ででき
る、仲介人(東京市には千四百
人程ある)に五錢位で出す、仲
介人は一日目につき二錢一三錢
の手數料とする

らるまで降下して結氷庫内の水
を凍らせる、この結氷庫内の水
がより商品の水になる、要す
るに液體アムモニアの蒸氣熱を
利用して水を冷却結氷させる筋
である、そしてこの液體一ア
ムが氣化するには百四十九カラ
リーの熱をよほりから吸收する
のだ

藤原製

禍水の都京！ 慘凄



寫眞説明

①京都市四條大橋上から望む物凄く賀茂川の奔流、前方は團栗橋 ②流天した五條大橋の残骸 ③四條大橋にひつかつた流材を取片付け中の伏見工兵隊 ④本社機上より見たる下鴨剣先付近の惨状、左は菱橋(賀茂川)右は河合橋(高野川)何れも流失

